

イエスとキリスト教

倉 田 稔

も く じ

序

- 1 原始キリスト教
 - 1-1 イエスの生誕
 - 1-2 イエスの活動
- 2 イエスの死後
- 3 ローマ帝国でのキリスト教の布教
- 4 その後のキリスト教
- 5 ティベリウスとネロ
- 6 その後のバラバ伝説
- 7 聖書
- 8 コンスタンティヌス大帝によるキリスト教の変革
- 9 ローマ帝国の終わり

序

ここでは、原始キリスト教と、キリスト教の布教の際の事実と問題点を述べる。これが直接、現在のキリスト教の問題点の析出になる。初めは、つまり1では、普通にキリスト教といわれる常識の知識を利用して、それを検討する。

ローマ帝国皇帝コンスタンチヌスが現在のキリスト教を成立させたのである。彼はキリスト教でローマ帝国を支配しようという大胆な政策を採った。

もちろん彼がキリスト教を決めたのではなく、決めさせたのである。ニケア公会議で一つのもの、つまり現在我々が知り理解するキリスト教になった。つまりキリストは神の子だという思想、三位一体の思想である。逆に言えば、もともとキリスト教は多種多様であった。

ここ1では、人々の知るキリスト教を前提にして、さしあたり描く。

1 原始キリスト教

イエス・キリストの生誕 (BC.4年) から60年も前に、ローマ帝国が東方を征服し、またエルサレム王国を倒した。ローマ帝国側のエルサレムの司令官はポンペイウスであった。彼は、ユダヤ人の大神殿、すなわち彼らが最も崇拝している神殿に乗り込んだ。そしてその財宝を奪おうとしたが、財宝は発見できなかった。それ以来、ユダヤへの略奪・破壊が始まった。ユダヤ人は奴隷労働に従事させられた。ローマ帝国は、ユダヤ人支配を円滑に進めるため、アラブ系のヘロデをユダヤ王にした。なお、前27-後14年まで、ローマ帝国はアウグストゥス皇帝 (=オクタヴィアヌス) の時代であった。

1-1 イエスの生誕

非キリスト教徒がイエスについて最初に述べた言葉は、ヨセフス・フラヴィウス (37-c.100) 『ユダヤ古事』あるいは『ユダヤ年代誌』 (邦訳あり) であり、18巻3章と20巻9章1節で、イエスについて一言している。「イエスという男がいた。彼は十字架で殺された。」と。だがこれは偽作であることがわかった。後2世紀以来ヨセフス偽造の跡は至る所に見られ、後3世紀に1人のキリスト教徒が書き込んだ。ヨセフスの伝えるのは、当時メシア (主によって油をそそがれた者) としてパレスチナにあらわれたアジテーターはイエスと称したと、それだけである。

次にタキトス『年代記』15巻44章で、キリストが死刑に処せられた、とのみある。

エドワード・ギボンは、『ローマ帝国衰亡史』で、「あれほど驚くべきことを成し遂げたと言われているイエスについて、その同時代人の人々のうち、だれ1人として何の報告もしていないのは、奇妙だ」と書く。

新約聖書冒頭の「マタイによる福音書」では、その第1章の前半部分が「イエス・キリストの系図」（新約聖書 第1節）である。アブラハムから数えて14代目がダビデ王であり、41代目がイエスである。いや、そうされている。聖書では42代目(14+14+14)となっている。しかし、正確に数えると41代目である。この長々しい系図の大切な所は、イエスがダビデ王の子孫であることを示す点にある。ユダヤ人は王の子孫を尊敬したのである。

ユダヤ人の初代の王は、サウルである。イスラエルの人々が王を望んだので、預言者サムエルが、ベニヤミンの人、勇者サウルを王に立てた。サウルは最初の王になった(旧約聖書)。その後、次に、ダビデが王になる。そのときダビデは30歳だった。彼は、国を40年間治めた。そしてシオン(Sion[sai:ən]=Zion [za:iən])をダビデの町にした。ダビデはエルサレムで妻と側女を入れ、子が多く生まれた。ダヴィデは、他人の妻だったバテシバ(1)を迎え入れ、その夫、つまり前夫を戦地に送って死なせた。彼女は子を生んだ。その子はソロモンと名づけられ、ソロモンが次の王になった。

ユダヤの人々は、世俗の王と精神の王とを区別しなかった。そこで新約聖書の作者は、イエスを王の血統に入れる必要がどうしてもあった。ところが、この「ためにする」系図作りも、最後の土壇場に来て、とんでもない矛盾をはらむことになった。それはイエス誕生のくだりであった。

「イエス・キリストの誕生の次第はこうであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、まだ一緒にならない(正しい日本語としては「なる」であろう)前に、聖霊によって身重になった」(第18節)。有名な処女懐胎説である。クリスチャンはこれを信じている。これはイエスを神の子とするための手段である。普通の人・大工ヨセフと普通の女性マリアの子であっては、イエスは普通の人間になってしまい、神と関連づけられなくなる。ありがたさがなく

なる。そこで無理に聖霊の子とする必要があった。この種の作業は、キリスト教だけの仕事ではない。ギリシャ神話にもある。伝説時代の古代ギリシャの王侯・貴族は、ギリシャの神々の子であるとされて、貴い性格を与えられたのである。例えば、英雄アキレウスは女神テティスの子であり、美女ヘレーネはゼウスの子である、というように、である。キリスト教の作者は、キリストとキリスト教を聖化すべく、ここで聖霊をもちだした。キリスト教にとって大切な三位一体説（神・聖霊・御子が一体であること）が、ここから発生して来るのである。

夫ヨセフは、夢の中で、主の使いから、マリアの「胎内に宿っているのは聖霊によるのである」から、心配するな、と聞いた。だが、ヨセフが普通の男性だったら心配するだろう。そして彼は「マリアを妻に迎えた。しかし、子が生まれるまでは、彼女を知ることはなかった。そしてその子をイエスと名づけた。」（第24節）ここで「知る」というのは、夫婦の交わりのことであり、上品な表現である。マリア様も聖霊を呑み込んで、ぎぞかしびっくりしたであろう。ヨセフも誰の子から分からない子をマリアが身ごもったと聞いて、啞然としただろう。普通だったら、誰か他の男性の子だと思って、怒っただろう。それにまたイエスが生まれるまで、ヨセフは夫婦生活を差し止められていて、可哀そうである。新約聖書の作者の、人が悪いにもほどがある。

ところが、これがとんでもないことになった。作者は致命的の矛盾を作ってしまったのである。イエスがヨセフの子であれば、ダビデ王の子孫になるが、聖霊の子としたので、ダビデ王の末裔ではなくなってしまった。これでは何のために長々と系図を作ったのか分からなくなり、その努力は水の泡となった。あちら立てればこちら立たず、こちらを立てればこちらが立たない、ということになった。

イエスの父は大工ヨセフで、母はマリアであり、普通の結婚である。ヨセフは王の血を引いているわけではない。マリアが夢をみて、精霊を呑み込んで、子供が生まれることはない。この種の話はエジプト神話にもあるから、話を借りてきたのかもしれない。宗教ではこういう話が好まれ、随所に見受

けられる。

イエスは、BC.4年5月20日に生まれた。なぜ12月25日ではないのかは、後述したい。誰でもクリスマスはイエスの誕生日だと信じ込んでいるのに、そうなのである。彼はベツレヘムではなく、ナザレ（＝ガリラヤ地方にある村）で生まれた。「ルカ伝」ではナザレ、「マタイ伝」ではベツレヘムとされ、聖書自体でも矛盾しているのである。これは、宗教宣伝の力点の置き方の違いの結果である。ベツレヘムは、ユダヤ人にとっては聖地であり、王が生まれるはずの町なので、「マタイ伝」では無理にベツレヘムとした。「ルカ伝」ではそれを忘れてしまい、あるいは知っていても、正しくナザレとしてしまった。しかしイエスら家族は、彼の誕生の時に、実はベツレヘムにさえも来なかったのである。

ルカ伝（＝「ルカによる福音書」）では、ヨセフもマリアもガリラヤのナザレの人だとある。だが、イエスをベツレヘムで生まれさせる必要があった。そのため次のようにしたのだった。「そのころ、全世界の人口調査をせよとの勅令が、皇帝アウグスト（ローマ帝国皇帝アウグストゥス）から出た。これはクレニオがシリアの総督であった時に行なわれた最初の人口調査であった。人々はみな登録をするために、それぞれ自分の町へ帰って〔登録を〕行なった。ヨセフもダビデの家系であり、またその血統であったので、ガリラヤの町ナザレを出て、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上がって行った。」（第1章第26節、第2章第4節）

ここで大切なのは、ヨセフがダビデ王の家系、血統であることに加えて、ベツレヘムがダビデ王の町であり、そこがヨセフの自分の町・故郷である点である。なにしろヨセフが王の血統をもつと主張する必要があり、それがこの作者の任務である。「すでに身重になっていた いいなづけの妻マリアと共に、登録をするためであった。ところが彼らがベツレヘムに滞地している間に、マリアは月が満ちて、初子を産み、布にくるんで、飼葉桶の中に寝かせた。」（第2章 第1・4節）

ここで大切なのはまた、イエスがどうしてもダビデ王の町ベツレヘムで生

まれねばならないことである。作者は何が何でもイエスをここで生まれさせたいのである。

ところで史実によれば、人口調査は確かに行なわれたことがあった。しかしイエスが生まれた7年後であった。しかも登録は現地でなされたのである。したがってヨセフたちは、何も、好きこのんでベツレヘムへ行く必要は毛頭なかった。聖書の作者は、恰好の事例を発見したと思ったであろうが、ズサンな創作をしてしまったのであった。ご苦労なことに、ヨセフも身重のマリアも、行く必要もない長い旅を無理にさせられてしまった。

そこに、東方の三博士が、ベツレヘムの方へ流れ星が落ちたので、御子の誕生だと思って、馬小屋にたどりついて、プレゼントをしたという有名な話があるが、そうなると、それも嘘である。

イエスは長男であって、妹弟がたくさんいた。7人きょうだいであった。ユダ、シモン、そして妹が2人、弟か義弟が、ヤコブ、ヨセフである。この兄弟が多くいたことも聖書では強調しない。イエスは父のように大工になろうとした。ちなみに当時の大工は建築だけでなく、雑仕事もしていた。

それは、エルサレムのヘロデ王(=親)の時代だった。ローマの圧政下で民衆は苦しんでいた。ローマ皇帝はアウグストであった時代である。耐え難い生活の中で、ユダヤ人は救世主を望むのだった。そしてローマ帝国に反対する多くの反乱が起きた。だがローマ軍がそれらを弾圧し、従来に増して厳しく支配した。ローマ軍は反乱者を十字架にかけて殺害した。ヘロデ王が死に、新ヘロデ王に、その息子ヘロデ・アンティパスがなった。彼は兄ピリポの妻=ヘロデヤを娶った。彼女ヘロデヤは、兄から弟へ乗り換えたわけだった。この妻の娘が有名なサロメである。

ローマからポンテオ・ピラトがユダヤ総督になってきた。ガリラヤとヨルダンだけが新ヘロデ王に与えられた。ピラトが任務地にくる途中、バラバーバ(Barabbas)の襲撃が起きた。バラバーバは普通、盗賊、殺人者とされる。実際は、それに加えて民族解放者でもある。

若いイエスは僧侶になった。彼は、預言者=洗礼(バプテスマ)者ヨハネ

からヨルダン川で洗礼を受けた。ちなみに、キリスト教では、「予」言でなく「預」言である。イエスは僧なので、文字が読めるし、学があった。彼は旧約聖書を深く勉強しただろう。旧約聖書はユダヤ民族の話である。大体紀元前5世紀くらいにできたと思われる。これはヘブライ語で書かれていた。イエスは文字を書いていない。もしかしたらイエスの書いた物が存在するかもしれないが、今のところはない。一方、当時の民衆は文盲だった。イエスは山で修行をする。それは40日間とされる。伝記＝聖書では、飲まず食わずとした箇所と、そうでない箇所とがある。だから「飲まず食わず」は嘘である。イエスの修行中に悪魔が出てきたが、これは釈迦の場合と同じであり、こういう話も宗教ではよくとりあげられる。

一方、ヘロデ王を挑発した容疑で、僧ヨハネが、ヘロデ王に連行された。ヘロデ王は、宴席で、踊りのうまいサロメ(2)に踊りを所望する。サロメは妻ヘロデヤの連れ子である。踊りのほうびに、ヘロデ王は彼女に何でもやると言う。そこで踊り終わってサロメは、母(=妃)に聞いた。母は、ヨハネの首がほしいと言い、それを王に告げた。母はヨハネを憎んでいた。ヨハネは、義兄から義弟＝ヘロデへ乗り換えたと言って、サロメの母を批判したのだった。ヘロデはまずいことになったと思うのだが、約束なので、ヨハネの首を与えることにした。こうしてヨハネは殺されてしまう。

1-2 イエスの活動

イエスは本格的に巡礼を始め、宣伝活動をする。30歳以降のことであったと新約聖書にはある。そうすると彼の活動は4年ほどである。彼は、ユダヤ教内の広い意味のエッセネ派であった。彼に弟子が出来た。初め、漁師シモン、その弟アンデレが、弟子になった。シモンは、後にシモンなる人が加入するので、ペテロとなる。早い方の弟子が改名するのはおかしいが、後者の方が身分が高かったのかもしれない。漁師らしいヨハネ、ヤコブ兄弟も参加した。イエスは、当時多く存在していたユダヤ教各派のうち、一つの新興宗教のセクトの指導者であった。彼らは人々から食事や宿泊の施しを受け、野

宿をして暮らした。托鉢生活だった。彼らは乞食坊主集団であった。

イエスは、病、盲目、足なえを直し、死人を生き返らした、とされる。心の問題から病気になった場合は、イエスは治せたかもしれない。慰めや心の平安を与え、心の病を治したかもしれないのである。だが身体的病は治せない。だが、当時の宗教はそのような宣伝は朝飯前であった。またこれらの奇蹟は後に書かれたものである。当時のイエスが実際にそのような奇蹟によって病いを治したかどうかは不明であり、たぶんそうではないだろう。だが、病気を治す宗教でなければ、滅多に流布しないのである。そこで、この種の話が無尽蔵に作って、宗教宣伝を促進する必要があった。ガリラヤ湖上でイエスが水の上を歩いたという話も同様である。

ユダヤ教の他の宗教者は、戒律や凡俗のことを説教した。だがイエスは違った。弟子に新しい宗教教育を行なった。しかしそう簡単に弟子たちは俗世の観念を断ち切ることができなかった。ある時、イエスが精神の王国をつくるというのに対し、弟子は、「それでは大臣の椅子をくれますか」と問うのだった。彼らはここでは俗物である。

概してイエスの伝記は小説と同じである。ある金持ちの家で、金持ちは救われますか、とイエスは問われ、「らくだが針の穴を通るより難しい」と彼は答えた。

マグダラのマリア姦淫事件で、イエスは彼女を助けた。彼女は普通は娼婦とされていた。聖書ではそのような記述はない。さて当時は罪人への刑は石打ちの刑だった。彼女はそうされることになった。石を沢山投げられれば、死んでしまうのだ。追われた彼女を後ろにして、イエスは「罪を犯したことのない人だけ、石を投げよ」と、民衆に言った。こうして誰も石を彼女に投げられなくなった。ただし、新発見資料によると、イエスはマグダラのマリアと結婚した、すくなくとも恋愛関係にあった。ユダヤ人はとりわけ子孫を大事にしており、そのためユダヤでは当時男性が結婚しないことを禁じていた。妻を持たない人は一人前には扱われない。だからイエスに妻がいた可能性は否定できない。また子供のいない者も一人前に扱われず、さらに、イエ

スに子供がいてもおかしくはない。キリストは父親でもあった。イエスは、自分の死後にマグダラのマリアに宗派の指導を託した。マグダラのマリアはベニヤミン族の出で、有力な一族の出である。そして王族とされる。しかしそれは疑わしい。キリスト教やユダヤ教では、指導者が王族であることを好むからである。

イエスは、弟子達と共産主義的共同社会を作った。といっても、財産がないから、簡単である。イエスは共産主義者なのである。

その後、ピリポ、バトロマイが、弟子に加わる。取税人マタイも続いた。当時、取税人はローマの手先として嫌われていた。税金を取り立ててローマ帝国に渡すのだから、尤もである。しかしイエスはその彼をも弟子にしたのだった。

イエスはエルサレムを訪れた。イエスは人々に王と呼ばれた。そのために、密かに軍隊を集めていると見られた。彼はそこで、山上の演説、「垂訓」といわれる説教をする。イエスの思想は愛と平和の思想である。「貧しき者は幸いである」、「狭き門より入れ」、「滅びにいたる道は広い」など、いずれも有名なものである。しかし民衆はすこし落胆する。果たしてイエスでは民族独立革命を行なうことができそうにはないと思う。当局もイエスの活動は謀反には当たらないと判断した。

イエスは、一時ナザレへ帰った。母に会うための帰国であるが、父の葬儀だったからかもしれない。父は、AD.28年か29年にすでに亡くなっていた。故郷でのイエスは、たかが大工の子に過ぎなかった。故郷の人々はハナ垂れ小僧のイエスを知っているだけだから、それは無理はない。そこでイエスは、「故郷では人は尊敬されない」と悔しそうに言うのだった。彼はそこでは石を投げられたこともある。だが聖書によると、イエスが次第に救世主であるとの評判が高まっていった。そして首都エルサレムへ赴き、ここで説教したことで、ついに危害を加えられたのだった。つまり殺されるのだった。だからイエスは田舎にいればよかった。しかし効果的な布教を行なうためには、首都エルサレムの地を選ばざるをえなかった。

ほとんどの人は、メシアが政治・軍事指導者として降臨し、現実の国家を地上に築くのだと信じた。律法学者(ラビ)たち、パリサイ人(形式主義者、ユダヤ教の形式だけの教えをまもる人)たちが、イエスを罪におとそうとする。これはユダヤ教内の宗派争いであり、近親憎悪がそれに加わった。ピラトは、イエス逮捕令を出した。イエスは教えを説くことを使命とした。新しい宗教を作り、古いタイプのユダヤ教も攻撃した。イエスが問題にしたのは、古い伝統や形式ではなく、心であった。

12使徒は、ペテロ(=シモン)、ヤコブ、ヨハネ(ヤコブの弟)、アンデレ(ペテロの弟)、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、ヤコブ、タダイ(この2人はアルバヨの子)、シモン、ユダである。ただし「ルカ伝」では、タダイの代わりに、ユダ(コブの子)をおいている。イエスは彼らを時に四方に送って伝道もさせた。イエス集団は、律法学者や、パリサイ人への批判を行なった。これで古いユダヤ諸派の人々の怒りを買った。12人の弟子には、学はなかった。つまり文盲であり、またイエスがそうであるように、彼らは名しか持たなかった。当時の民衆が姓を有することはなかった。

イエスは、過ぎ越しの祭りの前、エルサレムの神殿の前で大衆を集めて演説を行なった。ローマの圧政に対して反乱を企てていたバラバは、これを利用してしようとした。バラバはイエスと組んで民族独立の統一戦線が作れるかどうか考えた。しかしイエスは平和主義なので、バラバはやめたのだった。平和と愛では、ローマ帝国の打倒には役に立たないのである。イエスは、自分は神の子だという発言をするが、これはどうだかは分からない。バラバは宮殿を襲うが、失敗し、捕まる。イスカリオテ村出身のユダの裏切り(3)が起きる。彼は、バラバの反乱=武力革命とイエスと、どちらにつくべきか迷った。そして大祭司カヤバに密通した。イエスとバラバとは同類である、と。イエスに危害を加えなければ、という条件で、イエスがどの人かを教えよう、とユダは告げた。イエスの集団の13人は最後の晩餐(4)をする。イエスは、ゲッセマネの丘で弟子たちと祈った。そこへ、ローマ軍、ユダヤ教徒、民衆が押し寄せた。ユダは、イエスと接吻することで、誰がイエスかを

知らせた、つまり謀反をしたのである。こうしてイエスがどの人だかが分かり、捕まってしまう。

裁判でイエスは、「ユダヤ人の王」を肯定する。ピラト判決は、「自由」であった。しかし民衆は「十字架刑を」と叫んだ。その人々はユダヤの反キリスト派の宗教者だったか、あるいはユダヤ僧らに教唆された人々だったろう。ここから、ヨーロッパでは反ユダヤ主義 (anti-Semitism) が出現するのである。キリストを殺したのはユダヤ人だ、という説である。だがキリスト本人もまたユダヤ人なのである。さて、祝日＝過ぎ越しの祭りでは、罪人1名の恩赦が認められる習慣であった。民衆は、イエスでなく、殺人者＝反乱者バラバを釈放する。バラバは人気があったはずである。悪く言えば、山賊だが、よく言えば、ユダヤ民族反乱の指導者だった。マルコ伝では「暴動を起こして」とある。だから単純な犯罪者ではない。イエスが選ばれなくて、バラバが選ばれたのは、理由があるはずであり、単なる殺人者を民衆は選ぶはずはない。

監獄から死刑場ゴルゴダの丘までイエスが十字架をかついで行く際に、母マリア、マグダラのマリア、サロメ [有名なサロメではない] が、参列した。どうしてここにマグダラのマリアがいるのだろうか。やはりイエスの妻だったと断定されるのだ。また母マリアがここにいるとは考えられない。釈放されたバラバもイエスの十字架かつぎを見た。

何人かの強盗とともに、ゴルゴダの丘で、イエスは十字架上で刑死する、AD. (アンノ・ドミノ) 30年だった。イエスは、「神よ、私をなぜ見捨てたのですか」と、きわめて人間的な言葉を、ここで漏らしている。聖書の立場からは問題視されるだろう。イエスはここで神を疑っている。キリスト教ではこのような疑念を言うべきではないはずである。しかし聖書では明記されている。イエスを槍でついたのは、ロンギウスだった。

イエスが死んだ時、少なくともパレスチナでは3時間闇につつまれたことになっている。この現象は日蝕が起きた可能性を示唆するが、プリニウス『自然誌』では日蝕について、特に一章をあてているが、この時の日蝕について

は何も語っていない（ギボン15章）。だからこれも創作である。

2 イエスの死後

30年4月にイエス・キリスト（キリストとはギリシャ語で救世主の意味）は死んだ。復活を最初に見た女性はマグダラのマリアである。またもや彼女はイエスの近くにいることになっている。イエスは、刑死して3日後に復活した、そして昇天したとされる。これが宗教として効奏した。マグダラのマリアや弟子たちが夢でも見たのだろうか。人は、愛する人が死んでも、その人に似た人を身の回りで見るものである。弟子たちがキリストの墓を見にいったら、キリストの身体がなかった、という。復活を信じることがキリスト教徒の条件である(5)。またキリストの知人たち、すなわちエマオ村の人々が、墓を見て、イエスがいないのを知り、そしてエマオ村へ向かって歩いていたら、ある若い人に会った。そこで彼と一緒にエマオで食事をした。(6)若い人は急にどこかへ行って見えなくなった。それはキリストだった、という。これも、宗教では、奇蹟をめぐる不可欠な話であろう。

マグダラのマリアは、イエスの死後、パレスチナを離れるしかなかった。後述のローマ帝国の弾圧があったからである。アリマタヤのヨセフに助けられて、マグダラのマリアはサント・マリー・ド・ラ・メールについた。ガリアにゆき、女の子を産んだ。サラという名だった。イエスに妻や子がいるとなると、後のキリスト教としては神聖さが失われるので、仮にそれが事実であれば、何としても隠蔽する必要が生じるだろう。サント・ボームの洞窟で、マグダラのマリアが修行し、当地には彼女の聖遺物が保存されている（本当かどうかはわからない）。1969年に、マグダラのマリアが娼婦ではなかったと、バチカンの法皇、つまりヨハネ・パウロ2世は宣言した。それは当然である。聖書では彼女が娼婦だとは書いていない。

「使徒行伝」は、主に前半がペテロの、後半がパウロの活躍の話である。

さてパウロがキリスト教を作り替えた(7)。パウロは、初め熱烈なユダヤ教

徒で、名はヘブライ語ではサウル、聖書ではサウロである。小アジアのタルノス出身で、ローマ市民のユダヤ人だった。ステパノらのキリスト教徒の宗教運動を迫害した。だが彼はダマスクスで回心した。洗礼を受け、熱心なキリスト教徒、宣教者になった。パウロはイエスを知らなかったはずである。「使徒行伝」(第1章)では、12使徒は、タダイが抜けていて、11使徒になっている。これは不思議である。

イエスの死後、一部ユダヤ人がイエスを尊敬していた。それはパウロやペテロの伝道によるところが大きい。その後、一部ギリシャ人がイエスの後継グループに加わり、イエスを尊敬した。

パウロは原始キリスト教会最大の伝道者である。口伝えで、パウロとペテロが伝道する。彼らは字が書けないからだった。まずイエスの教えとされるものがユダヤ人に広がった。ユダヤ人は世界に、つまりローマ帝国中に四散していた。ペテロがローマで布教した。パウロが考え、パウロとペテロが行動する。両者はギリシャからローマまでを往復する。パウロは、第1回と第2回の伝道がギリシャ、第3回はローマ・ギリシャで行なう。パウロはエルサレムでユダヤ教徒に捕まえられ、2年間獄に入った。皇帝に上訴してローマに送り返されたが、そこで2年間軟禁された。48年に、エルサレムの使徒会議が開催された。50年にパウロはアテネに伝道のために行った。51-57年にパウロはまた伝道した。59年にパウロは再びエルサレムで禁固になった。60年に、ローマに伝道して捕まり、63年に釈放された。ネロの迫害にあって殉教したらしい。キリスト教はさしあたりパウロが作ったものだった。

ペテロはローマへ行く。こうしてイエスの教え=パウロ教が、ギリシャ世界で広がった。このセクトの考えは、ユダヤ民族主義一辺倒ではなく、国際性を持っていた。そこで外国人つまりギリシャ人にも受け入れられる要素があった。

イスラエルでのユダヤ人のローマ帝国による弾圧が起きる。

3 ローマ帝国でのキリスト教の布教

前27-後14の治世のアウグストゥス皇帝=オクタヴィアヌス(BC.63-AD.14)の時代に、ローマは共和制から帝制へかわった。イエスが死んだのは、ティベリウス帝時代である。紀元後4年、ティベリウスはアウグストゥスの養子になり、後14-17年がティベリウスの治世であり、丁度イエスの青年時代にあたる。

余談であるが、旧約聖書は、ユダヤ人が長い間イスラエルに住んでいたのだという誤解を、ヨーロッパ人に与える。ユダヤのディアスポラ(四散)が一世紀に起きていたのだ。ユダヤ人がイスラエルに住んだのは、主としてダヴィデ王の時代からであり、たかだか500年にすぎない。第2次大戦後、国連が、実際にはイギリスとアメリカが、ユダヤ人の国家イスラエル建国を承認した。ヨーロッパでの、ユダヤ人がこの地に長く住んでいたという偏見が、このような決定に至り、現在の紛争を引き起こす決定的原因のもととなった。

さて、ローマ人はローマの神々を崇拜し、信仰の対象としていた。

キリスト教は、初めユダヤ人に、そしてギリシャ世界に、ついでローマ帝国の奴隷に流布した。これは愛と平等の倫理学である。ローマではペテロが活躍する。

人は神の前に平等であり、イエスを信じれば救われるという説が、ローマ帝国の奴隷階級に受け入れられる。彼らは希望のない現実に生きていた。キリスト教が言うように、イエスを信じれば天国へ行けるという話は、社会の底辺で生きる者に救いを与え、彼らの支持をとりつけたのである。ローマ帝国には、市民の数倍の奴隷がいた。

キリスト教は野火のように広がった。しかしローマ皇帝でなく、イエスを絶対の存在と信じることは、ローマの権力者にとっては危険思想であり、キリスト教は弾圧されることになる。弾圧によりキリスト教徒は地下活動によって布教をし、キリスト教はまたたく間に広がった。イエスの教えはローマ帝国=世界帝国の膨大な奴隷や、また非ユダヤ人にも浸透していった。旧

約聖書はユダヤ民族とユダヤ教の歴史を記し、ユダヤ教はその民族だけを救う宗教である。しかしキリスト教は、民族を問わず、誰もがイエスを信じれば天国へゆける。貴族も奴隷も同じ人間であり、人は神の前に皆平等であり、汝の隣人を愛せよ、と説き、社会的弱者の哲学だった。キリスト教には普遍性・国際性があった。

4 その後のキリスト教

ティベリウス帝の治世に、ガリオ護民官の息子マーサラスが、コリント出身のギリシャ奴隷デメテリオとともにエルサレムに赴任させられた。そこは帝国の病巣であった。彼らは船でエルサレムへ行った。エルサレムでは、ピラト総督の命令でイエスが死刑にされ、マーサラスは彼を磔にする。その後すぐ、マーサラスにはローマへの召還命令が下った。しかしまた再びスパイとしてエルサレムへ送られた。ティベリウス帝が死に、カリグラ帝の時代となった。マーサラスは、エルサレムでキリスト教徒に改宗した。つまりローマ帝国の謀反人となったのである。そしてローマへ戻り、布教活動をした。だがデメトリアスが捕まった。マーサラスは、彼の救出の際に捕まり、恋人のダイアナ姫とともに死刑となる。マーサラスはキリストの最後の衣を持っていて、これをペテロに渡した。

ペテロは、旅に出るので、衣をデメトリアスに渡した。カリギュラ帝はそのキリストの衣を懸賞金をかけてまで探させた。焼物師となっていたデメトリアスは、近衛兵に抵抗し、そのため剣闘士にさせられていた。彼はクロードディアスの闘士養成場に収容された。クロードディアスは皇帝カリギュラの叔父で、クロードディアスの妻は、メッサリーナであり、元イシスの巫女であった。

デメトリアスはクリスチャンであることを知られ、戦わせられた。剣闘士は奴隷である。相手を殺し、よく闘った者は、褒美として解放された場合がある。デメオトアスは、助かり方を教えてくれた命の恩人であるグライコン

と闘うことになったが、2人は闘いを辞めさせてもらえた。しかしデメトリアスはトラとの勝負を命じられた。だが彼は勝った。そして彼はクローディアス家の護衛に迎え入れられた。クローディアスの妻メッサリーナは彼に惚れた。だがメッサリーナの愛を断わり、そのため再び養成場へ入れられた。だがデメトリアスに恋心を抱いていた陶芸店の女性が殺されたことをきっかけに、彼は信徒であることをやめた。やがて剣闘での闘いで勝利し、彼は自由の身分になり、護民長官の地位についた彼は、メッサリーナと親しくなる。ここでペテロがデメトリアスに会いに来たが、彼はペテロを拒否した。デメトリアスは、皇帝の命令で聖衣を手に入れるために、ユダヤ地区に入った。だが恋人ルシアが、聖衣を握ったままの状態、仮死状態で見えた。デメトリアスは神に祈りを捧げ、それによってルシアは目覚めた。デメトリアスは、聖衣を皇帝に渡した。皇帝は罪人を殺して、衣の効き目を試すが、罪人は生き返らない。皇帝のそのような試みにデメトリアスは皇帝に逆らった。そこで再び闘士となったデメトリアスは、最強の剣士マクロと闘うことになる。近衛兵らは、マクロに槍を投げ、デメトリアスを助け、そしてカリギュラに槍を投げ、彼は死ぬ。クローディアスは皇帝になる。そして国家に反逆しないかぎり、キリスト教に害を与えないと宣言する。

5 ティベリウスとネロ

ティベリウス帝の次のカリグラ（これはあだ名）帝は、精神疾患で、暴虐な政治をし、殺された。その次の、皇帝クラウディウスは、女性に目がなく、4回結婚した。最後は姪・アグリッピーナと結婚した。かの暴君ネロの母になるこのアグリッピーナは、少女時代に政争のひどさを知った。初めの結婚で、ネロが生まれ、その後夫と死別し、彼を連れてクラウディウスと再婚したわけだった。彼女はネロに帝王学を学ばせた。彼女は、子供ネロを帝位につける目的でクラウディウスと結婚し、54年に夫を毒殺する。

ローマの人口は、当時 100 万人だった。キリスト教が脅威的な勢いで広がっ

た。彼らは魚の形を記して知らせあった。魚の図像は、イエスの弟子たちの多くが、特にペテロが漁師だったからである。キリスト教は、奴隷だけでなく、ローマ市民の間にも秘かに広がった。キリスト教徒であることが判明すれば、反逆罪で殺された。

ネロが帝位につくと(治世 54-69 年)、側近として哲学者セネカらが彼を補佐した。ネロは母のすすめで、かつての皇帝の娘と結婚した。ネロは義弟を殺した。59 年に母アグリッピーナを殺した。妻を追放し、愛人を妻にした。その後、前妻を処刑した。これらは、妃のそそのかしにもよる。ネロは、自分を神の子だと見なすと同時に、人々からもまたそう思われた。ネロは、民衆嫌いで、へたな芸術愛好家で、へたな詩作をした。妻ポペアーは、悪女、好色であった。ネロは、ローマ市が、臭くて、それは民衆の生活に原因があると思ひ、ローマ市を火災で一掃して、新しい都ネロ・ポリスを作ろうとした。実際は下水設備が悪くて臭いのだった。ローマ帝国は一部に下水が整備されていたが、19 世紀にいたるまでヨーロッパの都会は糞尿の臭いが立ちこめ臭かった。また彼は、昔のトロイの大火をしのぐ猛火でローマ市を焼き、それにもっと靈感をえて、作詩につなげようとした。こうして、後 64 年、彼はローマの大火を起こした。ネロの軍人がローマ市内で火をつけた。それをやはりローマの住民の一部は見てしまったのだ。それによりネロは、「暴君」に続いて、「放火魔」のあだ名を得た。ネロは、周囲の入れ知恵により、キリスト教徒が放火をしたと噂を流し、キリスト教徒に罪を押し付けた。ネロの迫害であり、これが後 64 年に起こった第 1 回キリスト教徒迫害であった。キリスト教徒を掴まえると、火あぶり、十字架刑、競技場でライオンの餌食にするなどして殺害した。バラバもこの最中に捕まり、十字架の刑に処せられた。ペテロは、迫害を逃れるよう強く勧める信徒の言葉に従い、ローマからギリシャへ布教に旅立った。ここから小説(6)によれば、ペテロは、途中アツピア街道で、復活したイエスの姿を見て、びっくりして、ペテロは尋ねる。「クオ・ヴァディス・ドミネ (Quo vadis, domine)?」彼はユダヤ人だから、このようにラテン語は喋らなかつただろう。そこでイエスは答える。「ローマ

の民を捨てるなら、ローマへ行って私はもう一度十字架にかかろう」。これを聞いて、ペテロも改心し、ローマへ引き返した。そして捕まった。十字架刑にされると思えば、師と同じであることと喜んだ。しかし彼は十字架に逆さに掛けられた。一方、パウロは斬首される。65年ころだった。ペテロが殺された場所に、後にサン・ピエトロ寺院が立つのであった。そしてここは後にバチカン宮殿となる。

65年、ネロは、セネカを陰謀の罪に問い、自殺に追い込んだ。ネロの妻も怪死した。一説によると、殴り殺したともされる。ネロ政府は、財政危機で、有力者を追放・処刑して財産を没収する時代だった。68年に軍隊反乱が起り、元老院はネロを公敵と宣言し、68年に本人は自殺した。

6 その後のバラバ伝説

過ぎ越の祭りの恩赦で、イエスの代わりに釈放されたバラバは、再びローマ軍攻撃を行って、捕えられた。死刑判決ではなく、奴隷とされた。彼は硫黄鉱山で長年の労働をする。その後、友人とともに貴族に買われ、奴隷としてローマへ連れて行かれ、剣闘士になった。友人はキリスト教徒であり、それが分かると、見せしめとして処刑された。バラバはまだキリスト教徒でなかったので、命は助かった。しかしそのことでショックを受けた。彼は剣闘士として闘って、勝って、自由をかちとり、そしてキリスト教に向かう。だがローマの大火で捕まり、十字架に掛けられる。

7 聖書

後50年に、ゾロアスター教典が結集した。キリスト教より文献上では早いこととなる。

「新約聖書」のボリュームは少なく、「旧約聖書」の4分の1である。4福音書は「新約聖書」の半分弱である。「新約聖書」には、福音、使徒行伝に、

21の手紙、ヨハネ黙示録が含まれる。「新約聖書」の冒頭を飾る四つの福音書、マルコ、ルカ、マタイ、ヨハネによるイエス・キリストの伝記は、もちろん、これら4人によって書かれたものではない。つづく「使徒行伝」は、12使徒の活動の物語である。これらは、中世ローマ教会が編集したものである。

イエスの死後、このセクトにギリシャ人が加入した。そして1人のギリシャ人が、このセクトに伝わるイエスの生涯を聞いて、ギリシャ語で書き上げたのが、「マルコ伝」であった。これは、イエス死後50年に書かれたので、マルコが書いたのではない。この作品は、それゆえ、イエスの生涯を忠実に描いてはいない。この作者は、かなりのインテリであり、文才もあった。しかし彼がイエスに会ったことはないだろうし、彼にイエスの話を語った者も、実際にイエスに会ったことがあるかどうかは分からない。もしその人が会ったことがあったとしても、半世紀前の遠い昔である。こうしてマルコ伝はイエスの伝説を伝える書となった。ユダヤ人は、そして当時は、どの民族も無学文盲であったから、イエスのいたセクト(=宗派)の信者は、イエスが死んでも、彼の一生を口伝えて覚えていたにすぎなかった。

文字を使わない人々の記憶力は、それを使う人よりも優れているかもしれない。しかしイエスの伝記は、口伝えであり、不正確になりやすい。また、伝えられるうちにフィクションが積み重ねられる。その上、この作者もキリスト教を大いに世に宣伝しようとしているから、宣伝要素の多い作品である。各伝記の記述の半分は事実かもしれない。少なくとも聞き書きである。しかし半分は想像による付け足しである。

こうしてイエスについて最も正確だとされるこの伝記も、この成立事情から分かるように、良く言えば一種の文学作品である。

「ルカ伝」は、イエスの死の100年後に(9)、ギリシャ語で書かれた。さて、ルカ伝となると、その内容はより不正確になる。ほとんど伝説である。またマルコ伝と較べても、内容がずいぶん違ってきている。たとえば、「貧しい者は幸いである」という句が、「心の貧しい者は幸いである」となり、これでは何をか言わんやである。その後、「マタイ伝」、「ヨハネ伝」が書かれた。(10)す

べてギリシャ語(11)であった。これらの文章化、つまりギリシャ語化によって、キリスト教は知識階級の世界に広まるきっかけとなったのであった。

イエスの教えは、福音という。各4つの伝記つまり福音書は、宗教宣伝のねらいをどこに置くかによって、それぞれの内容において矛盾が生じている。標題から見ると、イエスの弟子が書いたように思われてしまうのだが、実際は違うのである。ここには、意図的にキリスト教会が読者に誤解をさせようとした作為性がある。

クリスマスは、12月25日だが、イエスの誕生した日として4世紀後半から祝われるようになった。イエスは5月20日生まれだが、12月25日に祝われた。だからキリストの生まれた日ではない。12月25日は、ローマ帝国のある地方で、ある宗教での火の神の冬至祭にあたり、この祝いがキリスト教に引き継がれた。キリスト教を広めるのにそうした方がよいというご都合主義で、クリスマスが作られた。12月25日は、エジプト神話の神の誕生日でもあり、キリスト教がそこから借用してきた可能性もある。

キリスト教のトリックの多くが後に作られた。例の1は、イエスは奇跡を起こした、病気などを治した、というものだ。これは数百年後の書物にそうあったと書いてあるにすぎない。

例の2は、原罪=人間は生まれながらにして罪がある、を強調したことである。アダムとイヴの楽園追放であり、智恵の木の実を食べたからである。人間は生まれながらに罪深い存在であり、イエスはその人間の罪を全部引き受けて、人々の身代りとなって死んで行った、という説である。その該当部分である旧約聖書に、そういう解釈はないから、後に作られたものである。さてキリスト教では、イエスを、またはその神を信じればその罪から救われるとする。これらは後世のキリスト教が、「旧約」と結び付けて発明したものであった。福音書(新約)にはそうした記述はない。またイエスはそういうことは語っていないのである。(12)

8 コンスタンティヌス大帝によるキリスト教の変革

ローマ帝国皇帝は、その後、ハドリアヌスとブブリウス・アエリウス(117-138)の時代になった。118年にキリスト教徒迫害がおきた。250年に、デキウス帝の時代に、再びキリスト教徒迫害がおき、250-304年にかけての時期はキリスト教徒に対する大迫害時代だった。

303年は、ディオクレティアヌス帝が、キリスト教徒迫害を開始した。最後のキリスト教徒殲滅である。305年、ディオクレチアヌスは、病気を理由に、権力を譲った。副帝の間に統治権が移った。やがて副帝の間に権力争奪戦が起こった。数名いた副帝の中でコンスタンティヌスとリキニウスが勝利者になった。

306-37年はコンスタンティヌス(c.280-337)の治世である。311年、キリスト教寛容令=セルディカが出された。312年、コンスタンチヌス1世帝は、キリスト教を公認する。ここからキリスト教が大きく変質する。

313年、2人つまり、リキニウスとコンスタンティヌスは、ミラノで会って、互いの和約を結んだ。コンスタンティヌスは西方を統治し、リキニウスは東方を治めることになった。同じくミラノで2人は勅令を発し、キリスト教に古来からのローマ宗教と同じ布教権を与えた。ミラノ勅令である。

しかし、コンスタンティヌスとリキニウスとの和約も、長くは続かなかった。やがて2人の間に勢力争いが起こり、324年、コンスタンティヌスは、リキニウスを倒して、東西を統一し、独裁君主となる。彼は不敗太陽神とキリスト教の神を結びつけ、統一の政策としてキリスト教を重視した。そして教会の建設と、分裂の調停に努めた。318-81年アリウス派と正統派との紛争が起きた。アリウス派はキリストを人間だと見た。

コンスタンティヌスはニケーア公会議を開かせ、325年、ニケーアの公会議が開かれた。

公会議の開かれたニケーアは、ニカイアともいう。現トルコのニコメディア南部の町ニカイアである。今のイブニクにあるアヤソフィア教会で会議が行

なわれた。ニケア公会議は、この第1回が325年6月19日から8月25日であった。教父たちにより原ニケア信条が発表された。アリウス派に対する“正統”信仰を表明するのが課題だった。そこではアリウス＝アレイオス派の追放を決定した。アリウス派はイエスは神ではないとした。このためにアレクサンドリアのアタナシオが活躍した。御子は御父に対して同一であるとし、アリウス主義への4つの排斥文があった。「われは、全能の父、すべての見えるものと見えないものの創造主である神を、信じる。神の子主イエス・キリスト、すなわち父の本姓より神のひとり子として生まれ……父と同一実体である。」第2回公会議は381年の第1コンスタンティノーブル会議であり、原ニケア信条をもとにニケア・コンスタンティノーブル信条が作られた。精霊は神ではないというマケドニウス派の排斥などが課題であった。

ここで、復活祭の日付などを決めた。それまで少なからぬ信者たちは、イエスを人間の預言者と見なしていた。ここで投票によりイエスは神の子となった。

コンスタンティヌスは、正統派教義の基礎を定めさせたが、コンスタンティヌス自らはアリウス派に近づいた。326年、アリウスが死んだ。

コンスタンティヌスはキリスト教をひろく保護した。子供たちにもキリスト教の教育を施した。キリスト教の僧侶は税金や貢税を免ぜられ、教会には商取引を結ぶ権利と相続権が与えられ、主教には裁判権が授けられた。

聖書を今日の形と内容にまとめさせたのは、この異教徒コンスタンティヌス帝だった。彼は実利的にキリスト教を公認した。また、このキリスト教は、後光や処女懐胎は、エジプト宗教から引き継いだ。聖体拝受、司教冠、祭壇、栄誦という、今日キリスト教を構成している儀式や様式の主なものも、異教から引き継いだ。エジプト宗教の、ミトラ神、オシリスは、12月25日を誕生日とする。ミトラ神は死後3日で復活し、キリスト教と全く同じである。キリスト教は、本来ユダヤ教の安息日＝土曜日を聖別していたが、コンスタンティヌスが、異教徒の太陽神の曜日、日曜日に変更した。

キリスト教には数千の文書があり、福音書も80以上あったもののうちが、

4つだけが、コンスタンティヌスに採用された。新約聖書の冒頭をかざる4つである。人間としてのイエスはコンスタンティヌスによって否定された。コンスタンティヌスはキリスト教を政治的に利用し、宗教をローマ帝国支配の手段に選んだのであった。

近年にいたって死海文書とハマディ文書が発見され、そこには新約聖書とは異なるイエスの伝記があった。いまだ知られざる伝記がなおも埋もれているかもしれない。

330年、コンスタンチヌス1世は、ローマ帝国の都をビザンチウムに移し、コンスタンチノポリスとした。同年、ローマのサン・ピエトロ寺院が建立された。

コンスタンティヌスは、専制政治体制の確立・身分制の強化、つまりコロヌスの土地緊縛令、軍制の改革など、ディオクレアヌス帝の後を受けて、帝国の再建をさらに前進させた。晩年は宗教的雰囲気に入り、死の床で、アリュウス派のエウセビオスから受洗した。

コンスタンチヌス時代以来、初期キリスト教会は、一貫して女性を貶める方針をとった。そして世界を欺いた。コンスタンティヌス帝時代以降、キリスト教は、聖なる存在であった女性を公然と侮辱し、母権的な異教社会から父権的なキリスト教社会へ転換した。

非キリスト民族は母権崇拜であった。シオン修道会はマグダラのマリアを、女神、聖杯、バラ、聖なる母、として崇拜し、その墓、聖杯文書と、イエスの子孫を守った。

9 ローマ帝国の終わり

361年、背教者ユリアヌス皇帝(361-364)⁽¹³⁾が即位した。背教者(renegead)というのはキリスト教側のレッテルにすぎず、彼はギリシャ・ローマ文化の心酔者だったから、そう言われたにすぎない。376年、ゲルマン民族大移動がはじまった。391年、テオドシウス帝は、キリスト教以外の宗教を禁止した。

395年に、東西ローマが分裂した。5世紀初、ヒエロニムス(Hieronȳmus, 348-420)が聖書をラテン語に翻訳する。476年、西ローマ帝国が滅亡した。オドアケルにより、ロムルス帝が廃位された。これを境に、ヨーロッパは奴隸制から封建制へ移行する。

その後

591年にマグダラのマリアが娼婦だったという説が作られた。フランク王国メロヴィング時代はイエスを人間的に解釈した。

シオン修道会は1099年に設立された。十字軍でエルサレムを占領し、ゴドフロア・ド・ブイヨンによって結成されたこの派は、マグダラのマリアとその子孫を守ることを目的とした。これは中世では危険な思想だった。シオン修道会は、聖杯の場所を保管し、女神象徴に関心をもち、異教=キリスト教本流でないキリスト教を崇拝した。ヴァチカンの支配を嫌い、聖女崇拝、女神崇拝を中心におく。聖杯とは、キリストが最後の晩餐で使った杯である。

十字軍時代にエルサレムでテンプル騎士団が作られ、エルサレムでキリストに関する膨大な文書を見つけた。騎士団はヨーロッパへ戻ってから、法王から自治権力を認められ、大資産を有する集団となった。14世紀に、教皇クレメンス5世は、騎士団を異端とし、火刑をもって大弾圧に出た。

シオン修道会の総長は、ニュートン、ボッティチェリ、ユーゴー、ダ・ヴィンチ、ジャン・コクトーなどの有名人が並ぶ。(14)

1945年にエジプトで出たナグ・ハマディ文書では、イエスの伴侶はマグダラのマリアであり、キリストのお気に入りであったとの記述が発見された。

- (1) ヨーロッパ絵画ではバテシバが多く登場する。有名なものは、レンブラントのそれである。バテシバは湯浴みをしている時、ダビデに懸想されたので、必ず湯浴みのバテシバが描かれる。
- (2) オスカー・ワイルドの劇「サロメ」、リヒャルト・シュトラウスのオペ

ラ「サロメ」。

- (3) ユダの裏切りについて、太宰治「駆込み訴え」がある。
- (4) レオナルド・ダ・ヴィンチが、後に絵をかく。
- (5) ルーテル教会・本城牧師に教わる。
- (6) フェルメールが描く。
- (7) 「ユダヤ人の歴史」上下 徳間書店。
- (8) シェンキエヴィッチ『クオ・ヴァディス』（上下 旺文社），を見よ。
小説のヒーロー，ヒロインは，架空である。
- (9) カウツキー『キリスト教の起源』法政大学出版。
- (10) これら4福音書が知られて行く経過については，Archibold Robertson, *The Origin of Christianity*. London 1962. pp. 64-5.
- (11) それゆえ近世になってなゼラテン語でなくギリシャ語を学ばざるをえなくなったかを，アダム・スミスは『諸国民の富』（岩波文庫 第4分冊）で興味深く描くのである。
- (12) 補遺：イエス伝について。ヴァン・ルーン『聖書物語』；ルナン『イエス伝』，Renan (1823-1892), *Joseph-Ernest, Vie de Je'sus*. 1863. 綱島，梁川，阿倍能成 訳，ルナン氏耶蘇伝 明治41年；岩波文庫1941もある。；「死海文書」；ブラック「死海写本とキリスト教の起源」。
- (13) 辻邦生「背教者ユリアヌス」。ただし小説。
- (14) ダン・ブラウン『ダヴィンチ・コード』角川書店，これは小説であるが，宗教叙述については事実だとされるので，利用した。

(本文中で指示しなかった参考文献) ミシュリーナ「世界史教程 古代」：チュラノのトマス「アシジの聖フランシスコの第2の伝記」あかし書房：ブルクハルト「コンスタンティヌス大帝の時代」筑摩書房。岡田『マグダラのマリヤ』中公新書。